

各地で話題の病害虫

ナスハモグリバエ

学名: *Liriomyza bryoniae* Kaltenbach
英名: Bryony leafminer

本虫は幼虫が植物の葉に潜って葉肉を食害するハモグリバエの一種である。ヨーロッパにおいては温室栽培のトマトやキュウリの重要な害虫として広く知られている。わが国ではこれまでパレイショ



静岡県農業試験場 西東力氏提供

や宿根カスミソウでの被害が知られているが、近年、静岡県の温室メロンの加害種も本種であることが明らかにされた。

成虫は体長3mm内外、頭部前面と胸部側面から腹部腹面にかけて黄色、胸部と腹部背面は黒色である。卵は白色、長径0.3mm内外の円筒形をしており、主に葉の裏面の表皮下に産卵される。幼虫はわずかにクリーム色を帯びた白色で、老熟すると体長3mm内外になる。頭部は鋭く尖り、黒色で針状の口鉤をもつ。幼虫が葉肉を食害すると、細く白い蛇行状の潜孔痕を生ずる。寄生虫数が少ないと葉は萎ちたり、苗では幼虫が葉柄や茎へ移動して枯死することもある。

防除対策としては、ミナミキイロアザミウマを

対象とした育苗期のオキサミル粒剤、定植後のDDVP乳剤、DMTP水和剤の散布による同時防除が効果的である。

カボチャ白斑病

学名: *Cephalosporiopsis cucurbitae*
Hamaya et Inaba
英名: White stem blight

昭和59年、鹿児島県薩摩、大隅半島などでカボチャの茎葉に灰白色の小病斑が生じ、果実表面にも隆起した類似の病斑が見られ著しく商品価値を損なう病害が発生した。鹿児島県農業試験場及び農業環境技術研究所などが病原菌を分離・同定した結果、本菌は新種であることが判り、学名は



鹿児島県病害虫防除所提供

Cephalosporiopsis cucurbitae、病名はカボチャ白斑病と命名された。

本菌はペポカボチャ、西洋カボチャ、日本カボチャ、いずれをも侵す。

病徵ははじめ苗の株元に近い茎、葉柄に1~2mmの長紡錘形の灰白色病斑が多数現れ、病斑は次第に拡大し、葉柄が病変部で損傷しやすいため下葉の枯れ上りがみられる。葉では直接的被害は比較的軽く、葉脈部に病徵を生じた後、葉面に直径約1mmの小円形状の病斑が生じることがある。

本病は高温下で発生し易く、8~9月定植の抑制カボチャで発生するが、4~6月に定植した場

合にも軽い症状がみられる。

防除対策としては、発病初期に2~3回TPN水和剤の散布を行うと効果的である。

ナミクキセンチュウ

学名：*Ditylenchus dipsaci* (Kühn)

英名：Stem nematode, Bulb nematode

昭和61年、山口県萩市大島で奇形になったタマネギの鱗茎からナミクキセンチュウが多数検出された。本線虫は世界各地で種々の植物から発見されており、今までに450種以上の植物に寄生性が認められている。タマネギの被害は欧米諸国などでは古くから知られているが、わが国では、これ



山口県農業試験場 黒木功令氏提供

までにスイセンの被害は報告されており、タマネギでの被害が確認されたのは初めてである。

本線虫は雌雄とも体形が特に細長く、雌は体長1.0~1.8mm、幅0.04~0.06mm、口針の長さは11~13μ、雄は体長0.9~1.6mm、幅0.03~0.04mm雌雄とも体は前方に細まり、後方は鋭く尖っている。葉、鱗茎などの皮層や柔細胞組織の細胞間隙で生活し、植物体が枯死して乾燥すると休眠状態に入る。

山口県の発生ほ場で見られた症状は、軽症株では葉身がやや青味を帯びた緑色となり、重症株では葉身上部が折れ曲がり、葉身は光沢のある緑色または青緑色を呈す。鱗茎の奇形の徴候は軽症株でも見られ、鱗茎の肥大に伴って、多くが亀裂や奇形あるいは腐敗などの症状を呈するようになる。

防除対策としては苗床や栽培ほ場の土壤消毒が必要と考えられるが、具体的な消毒方法については今後の研究が待たれる。

ブドウ根頭がんしゅ病

学名：*Agrobacterium tumefaciens*

英名：Crown gall

本病の発生は大正時代初期にさかのぼるが、近年、数県下のブドウ園で、若木での集団発生がみられるようになり問題となっている。

病原菌は*Agrobacterium tumefaciens*であるが、生理・生化学的性質の違いによって、さらに、biovar 1, 2, 3の3つに分けられている。ブドウから分離される細菌の大部分はbiovar 3で、1, 2は極めて少ないといわれている。



果樹試験場安芸津支場 家城洋之氏提供

本菌のがんしゅ形成部位は、一般的には根、地際部、接木部付近または地上部であるが、とくにブドウでは、地上部のかなり上部にがんしゅが形成されることがある。接木部では、あわづぶ状のがんしゅが縦になって現われ、症状が進むとがんしゅが異常に膨らみ主幹部をとり囲むようになり、早期紅葉や樹の衰弱あるいは枯死する。山梨県果樹試験場の調査によると、甲斐路系、ネオマスカット、巨峰で発生が多く、デラウエア、甲州ではほとんどみられていない。

防除対策としては、①外観健全と考えられる部位からも病原菌が分離されるので、母樹検疫を行い無毒母樹を確保すること、②無病地で育苗することなどがあげられる。